

「人形劇をととした文化交流」実践報告

—愛知教育大学子ども向け人形劇サークル〈じゃんけんぽん〉の活動から—

愛知教育大学構師 生寫亜樹子

中川唯・村松良衣・田中光・加藤美有・佐藤沙悠美・鈴木千晴・鈴置実由・大澤佑子・
稲熊望畝・今枝春菜・小林陽子・福岡在菜・福岡弓佳・原江美子・栗木彩加・
宮地結実子・成田健之助（以上、愛知教育大学学生・OB）



はじめに

愛知教育大学子ども向け人形劇サークル〈じゃんけんぽん〉は、2013年度の交流協会文化交流助成により、初めての海外公演を行う機会をいただいた。日ごろ、大学近隣の小学校や幼稚園・保育所、子ども会等を中心に活動を行っている〈じゃんけんぽん〉にとって、国を超え、言葉の違いを超えて人形劇を上演することは大きな挑戦であった。

初めての海外公演の機会を下さった交流協会、公演先である国立臺灣師範大學、国立台北教育大學、臺北市立幸安國小の皆様をはじめ、公演にかかわってくださった全ての方々には心から感謝したい。人形劇をととした今回の交流の試みが、台湾と日本をつなぐささやかなきっかけのひとつとなり、今後の継続した交流のはじまりとなることを願っている。

I じゃんけんぽん台湾公演レポート

1. 台湾へ出発！初めての飛行機、初めての海外
集合は中部国際空港 7時 55分。学生 13名のうち 11名が、この公演のために初めてのパスポートを取得した。地理的に「日本の“ど”まん中」にある愛知ならではの、初海外の学生のうち多くが今回初めての飛行機体験とのこと。期待と緊張半ばの表情の学生たちは、搭乗手続きとセキュリティチェックを無事に終えた。

搭乗当日にたどり着くまでのエピソードをひとつ紹介したい。劇で登場する人形たちは全部、学生が心をこめて手づくりしているのだが、学生の人形たちへの思い入れは相当たるものである。聞くところによると、製作者（演者）に「人形がだんだん似てくる」のだという。さて、今回の旅に至るまでの最初の難関が、大道具小道具と人形を、どう運搬するのかという問題であった。50キロ



国立臺灣師範大學、臺北教育大学にて、ご協力ご参加いただいた教職員・学生の皆さんと。

じゃんけんぽん台湾公演日程および演目

◇公演日程

3月17日（月）

中部国際空港より台湾・桃園国際空港へ到着後、国立臺灣師範大學にて設営および練習。

3月18日（火）

午前：国立臺灣師範大學公演（於 綜合大樓・表演廳）

3月19日（水）

午前：臺北市立幸安國小公演

午後：国立臺北教育大學公演（於 北師美術館 MonTUE）

3月20日（木）

交流協会、故宮博物館で研修後、帰国。

◇演目（各25分）

①マヨケチャの冒険 ②スプーンちゃんのおんがくたい

を超える鉄製の舞台を海外まで持って行くことができるのか？デリケートなつくりの愛着ある人形を、預け荷物ではなく機内持ち込みにすることができるのか？学生たちは、事前に航空会社や警備会社へ何度も連絡を取り、舞台装置を梱包し、大事な人形の持ち込みについては、手足を動かすためのピアノ線が60cm未満であれば危険物とみなされず、機内持ち込みできることを調べることができた。初めての体験にともなう大きな課題を、入念な準備のもとたくましく越えた出発当日。学生たちは大切な人形をしっかりと抱いて、CI151便に乗り込んだ。そして、初めての台湾へ—。

これまで研究のために訪れてきた台湾が、じゃんけんぽんにとって初めての海外公演の場となることを嬉しく思った。私がひとりで歩いた台湾、私にとって特別な場所となりつつある台湾で、学生たちはどんな感動や発見と出会うのだろう。

（生嶌亜樹子）

2. 驚きの連続の台湾の街なみと夜市 —台湾に到着—

初めての海外旅行だった私は、台湾のこともほとんど何も知らない状態だったため、台湾についてから驚くことがたくさんあった。



中部国際空港にて、緊張の面持ちで集合。



台湾に到着！空港からの移動のバスの中で。

台湾の街につき、まず驚いたことは交通量の多さである。特にたくさんのバイクが広い道路いっぱいに並んで信号待ちしている様子は、日本では決して見ることのできない光景で、バイクが普及している台湾ならではの印象を感じた。また、日本にもある店が多くあったのも印象的である。サイゼリヤや吉野家などの飲食店のほかに、セブンイレブンやファミリーマートなどの日本でなじみのあるコンビニエンスストアもいたるところで目にすることができ、日本の文化がとても浸透しているのだということを感じることができた。

私たちが今回の台湾公演で楽しみにしていたことの1つに夜市散策がある。台湾は夜市がさかんで夜が長いと伺い、田舎暮らしで夜出歩くことがほとんどない私は夜市に行くことをとても楽しみにしていた。夜市は人がとても多く、にぎやかで活気があり想像以上で本当に驚いた。50嵐というタピオカミルクティーの店やマンゴーかき氷、チーズケーキの美味しいカフェなどたくさんの物を食べたが、1番印象に残った食べ物は猪血糕という食べ物である。スパイシーで日本には無い味付けだった。台湾にしかない食べ物を食べることができて、とてもいい思い出になった。台湾は独自の文化に日本の文化が融合したとても素敵なおとこだなど感じた。

(中川唯)



師大夜市で台湾の文化にふれる。

3. じゃんけんぼんの人形劇が初めて海をこえた日 — 国立台湾師範大學公演(1) —

今になって台湾公演を振り返ったときに私が最も鮮明に覚えているのは、なんと言っても海外初となる国立台湾師範大學での公演である。私は日本の食文化の紹介となる劇「マヨケチャの冒険」の主人公ケチャップ役を務め、さらに台湾で公演するにあたり観客への簡単な問いかけは中国語で言おう!ということになり、ますますプレッシャーを感じながら公演初日を迎えた。その日は開演の2時間前から準備が始まり、キャストは現地の学生より最終的な中国語の発音レッスンを受けた。自分たちの発音で果たして台湾の子どもたちに伝わるのだろうか? 不安な思いを抱いたまま、ついに海外での初公演の幕が上がった。劇が始まる直前の緊張は、まるで初めて役がもらえて演じることになった1年生のときのように久しぶりのものだった。けれども、私たちの劇のテンポに子どもたちがのってきて大きな声の反応が返ってくると、だんだんと緊張よりも楽しさや喜びを感じられるようになってきたのだ。無事に劇を終えたあと、舞台の隙間から観客席の子どもたちの劇を楽しんでいる様子を見ると自然にうれし涙がこぼれてきたのだった。海外の子どもたちにも私たちの劇の楽しさを伝えられたと実感した国立臺灣師範大學での公演が、私たちの大きな自信へと



師大夜市で台湾伝統の猪血糕に挑戦。

つながったということは間違いなだろう。この貴重な経験を生かし、これからも国内外を問わず大学サークルとして楽しい人形劇を届ける活動を続けていきたい。

(村松良衣)

4. 初めての台湾公演、ギリギリまでの戦い — 国立台湾師範大學公演(2) —

初めての海外公演、もちろん言語や文化の違いによる不安もあったが、初めに私の前に出てきた障害は、けこみ(人形劇用の舞台)の設置の仕方についてだった。中国語の字幕をパワーポイントで流すため、スクリーンの場所と兼ね合わせなければならない。また、客席により人形の向きが極端に変わるため丁度良い位置を探し、何度も舞台と客席を往復し微調整を繰り返す。けこみを建ててからは、各自練習へと移った。しかし、音量調整が上手くいかないという、新たな問題点が浮かび上がってきた。今回BGMは大学の放送機器を借りることになっていたが、スピーカーの位置や、音の微調整の難しさがあり、どうにも人形の声とのバランスが取りにくいのである。これも大学の人に無理を頼みながら、なんとか落とし所を見つけていた。

一日目、二日目と準備をする時間は充分あったが、それでもギリギリまで練習と微調整を繰り返

し、始まる直前もまだやらねばならぬ事があるのではとそわそわしていた。

しかし始まってしまえば、私は「ああ、何とかなるもんだな」と正直思った。子どもの歓声や笑い声を聞くうちに、今までの「無言の中進むことになったらどうしよう」という不安はいくらか落ち着いて、どこに行っても子どもの反応は一緒なんだ、という事実がストーンと胸の内に落ちてきた。失敗もなく、「マヨケチャの冒険」も「スプーンちゃんのおんがくたい」も終わる事ができ、嬉しいよりは、安堵の方が強かった。

(田中 光)

5. 子どもたちの笑顔の力 — 臺北市立幸安國小公演(1) —

この日の公演開始時間は8時15分。日本でもこんな朝早くから公演をした経験はない。不安でいっぱいの中現地入り。準備に取り掛かる。てきぱきと進めるなかでも、メンバーの笑い声が部屋に響く。この時間も私は大好きだ。この雰囲気、本番の緊張を和らげてくれるように感じる。子どもたちが入室してくると緊張感が一気に高まる。子どもの楽しそうな話声を聞くと気合が入る。まず始めに様々な調味料の紹介。人形が顔を出すと子どもたちが歓声を上げた。劇に向け、盛り上がりは最高潮に。そして「マヨケチャの冒険」



台湾到着の感動を味わう間もなく、真剣に練習する学生たち。



学生たちにアドバイスする師範大学大学院生の伊藤健さん(写真左)。



最初の演目「マヨケチャの冒険」。中国語で子どもたちに問いかける。

の始まり。中国語での問いかけに元気に答えたり、人形や料理に楽しそうな反応を見せたりする子どもたち。私たちも楽しんで演じられた。メンバーの自己紹介で公演は終了。子どもからの日本語でのお礼の言葉を受け、成功したことへの安心感と、子どもや先生方への感謝の気持ちでいっぱいになった。記念写真を撮り、子どもが退室する時、人形とのふれあいとともにじゃんけんぽんから子どもたちへ手紙と折り紙（ぴよんぴよんカエル）のプレゼントを手渡した。前日の夜、眠気を押し殺してみんなで作ったものだ。笑顔で教室を後にする子どもたちを見ていると幸せな気持ちになる。子どもの笑顔の力は本当にすごい、と改めて感じた。その後、片付けと写真撮影。子どもが描いたきれいなポスターは、じゃんけんぽんの宝物となった。幸安國小での公演は、じゃんけんぽんの今後の活動につながる貴重な経験となった。

（加藤美有）

6. 思いを伝えるということ 一臺北市立幸安國小公演（2）一

二回目の公演会場は臺北市立幸安國小。「ようこそ幸安小学校へ」とかかれた手作りポスターで出迎えてくれた。思ったよりも子どもたちとの距離が近く、一人ひとりの顔も見ることができた。劇を待つ様子は日本の子どもたちと変わらないと



初日の公演後のインタビュー、安堵の表情のチーフ田中光さん（写真中央）。

感じた。そわそわ、わくわく、たくさんの笑い声……。そして始まった公演。「你們 喜歡 美乃滋 嗎？」と私が尋ねると、こどもたちから「喜歡！」と声が飛ぶ。嬉しい。こんなに優しい異国のこどもたちに最高の舞台を見せたいとがむしゃらに演じた。上演後、こどもたちが「オネイサン オネイサンアリガトゴザイマシタ」と日本語でお礼の言葉を述べてくれた。まさか日本語でお礼と言われるなんて思ってもみなかったから、とても心を打たれた。私は「マヨケチャの冒険」でマヨネーズ役として中国語に挑戦していた。しかし、声調をはじめとして発音が難しく、通じているのだろうか、へたな中国語で劇をするのはむしろ失礼なのではないか、などと心配していた。しかし、一生懸命に私たちの国の言葉で感謝の意を伝えようとするこどもたちの姿を見て、それは杞憂であったと感じた。もちろん上手に言語を操れたら、それに越したことはない。しかし、人の心を打つのは素晴らしい言語能力ではなく、必死に思いを伝えようとする姿なのだ。言語は思いを伝える手段に過ぎない。そのことを私は幸安國小の子たちから学んだ。私はそうして最後の臺北教育大學での公演に向けて、思いを新たにしたのであった。

（佐藤沙悠美）

7. 最後の公演に、思いをこめて ―国立臺北教育大學公演（1）―

この日は、臺北市立幸安國小での公演をした後に、猫空で観光をしてきた。一つ公演をやり終えて、ほっとした気持ちで、初めての猫空を思い切り楽しんできた私たちは、再び気合を入れなおした。この臺北教育大學での公演が、今回の台湾公演の最後の公演であった。今までに二回公演をやってきた。反省点はたくさんあるが、それでもかなり手ごたえを感じていた。今回も自分たちで納得のいく劇を届けたい。満足のいく公演で今回の台湾公演を締めくくりたい。公演の時間が近づくとつれて、メンバーの緊張は高まっていった。お客さんは、子ども、学生、お年寄りとたくさんの方が集まってくれていた。私は二本目の劇で字

幕操作の係りをしていたので、お客さんの様子を見ることが出来たが、みんな人形に集中して見てくれていた。笑ってもらいたいポイントでみんなが反応して笑ってくれていたときは、私たちの劇が台湾の人に伝わっていることを実感して嬉しかった。私たちは満足のいく公演で今回の台湾公演を締めくくることが出来た。一本目の「マヨケチャの冒険」が終わったとき、主役を演じていた二年生の学生は汗をびしょりかいていた。二年生にとって、「マヨケチャの冒険」を演じる機会がこれが最後ということになっていた。特別強い想いで劇に臨んでいた。大好きな「マヨケチャの冒険」を最後にあのような場でやらせてもらえたことに、ただただ感謝である。

（鈴木千晴）



手づくりのポスターに出迎えられた幸安國小。



朝早くからの公演直前、発声練習をするメンバー。



2年生、3クラスの子どもたちを前に。



上演の後、教室を退場する子どもたちと交流。

8. 台湾の人たちと交わした「こんばんは」 — 国立台北教育大學公演（2） —

三日目の夜には、臺北教育大學で公演を行った。大学にある美術館内の会場に舞台を立て、白い壁に中国語と日本語の字幕を映すといった、普段の日本での公演とは異なる環境での公演に、小さな子どもから大人まで幅広い年齢層のお客さんが足を運んでくださった。

臺北教育大學では二つの人形劇を上演した。一つ目の「マヨケチャの冒険」は日本語に所々中国語を交えて、また二つ目の「スプーンちゃんのおんがくたい」は全て日本語で劇を行った。私は「スプーンちゃんのおんがくたい」で、主人公のスプーンちゃんを演じた。登場シーンで「こんばんは」と挨拶をするのだが、台湾の人々にも「こんばんは」と返していただけたのがとても嬉しかった。劇中に出てくる「可愛い」という台詞に反応してくれたり、色々な場面で笑ってくれた。公演終了後には多くの方が人形と写真を撮ってくださり、また、「出演成功」と書かれたとても立派なお花もいただいた。

「スプーンちゃんのおんがくたい」は全て日本語で劇を行うということだったので、公演が始まるまでは「全く反応がなくてシーンとしてしまったらどうしよう…」とずっと心配していたが、日本と同じように台湾の人々にも楽しんでいただけ

て、本当に良かったと思う。初めてで慣れないことも多くあったが、無事成功に終わることができた今回の台湾公演は、私にとって貴重な経験になった。

（鈴置実由）

9. 留学経験を発揮できた喜び —台湾の言葉—

私は約一年間、中国の東北部に留学していた。中国語が少し話せることもあり、今回初海外公演で台湾の人々と交流できることを心待ちにしていた。

多くの人を知っているとおり、中国大陆で話される「中国語」と台湾で話される「中国語」には違いがある。私がこれまで学習してきたのは、前者である。初の台湾公演、私は中国語での司会を担当することになった。自分の中国語がきちんと伝わるのか、台湾の人たちの反応はどうか、すべてが初めてで期待と不安が混ざり合った。そんな中、ついに「剪刀石頭布！！」と紹介される声が聞こえた。マイクを握りしめ、舞台に出て元気に挨拶。

・・・通じた！公演も無事に終わった。もちろん、まだまだぺらぺらに中国語を話せはしないが、観に来てくれた人がちゃんと反応を返してくれた。また、移動のタクシーや買い物をするときにも現地の人と会話することができた。言葉の通じ



「スプーンちゃんのおんがくたい」の一場面。



台湾最後の公演の名残を惜しんで続いた子どもたちとのふれあい。

る喜びを感じることができた。この喜びは、これからは中国語を学ぶ上での大きな糧となるだろう。

今回の台湾での公演は、私にとって貴重な経験となった。また中国語が通じるという自信にもなった。現在私は、教員を目指している。中国語が母国語の児童生徒がいたら、私の中国語を積極的に活かして支援して行こうと思う。

(大澤佑子)

10. 初めての台湾、現地で「発見」する楽しさ —台湾の食文化—

じゃんけんぽん、台湾公演の演目のうち、「マヨケチャ」はマヨネーズとケチャップが主役の、調味料の世界のお話である。せっかくの海外での公演、この作品と絡めて調味料のを中心に日本の食文化も紹介しよう、と準備を進めていた。こちらの文化を紹介するのであれば、あちらの文化についてもある程度知らなくては差異などの説明ができない。準備を進めている中で、実際に何度も台湾を訪れている先生から写真などで、台湾の飲食店やコンビニ、スーパーに売られている食品を見せてもらっていた。現地から送られてきた、コンビニやスーパーの写真を一見すると、日本のそういった店の様子とたいした違いはないようにみえた。確かによく似ていたのだが、実際に行って、自分の目で見てみると、また印象も違って来る。私が受けたのは、「商品が大きい」という印象だった。なにもすべてが大きかったわけではないが、飲み物や食品の袋、缶など、日本で見るとよりも大きなものが多い。日本の商品も多い、など事前に知り得た情報よりも実際に見て思ったことが強く印象に残った。

旅行中の自分たちの食事についてとにかく色々なものを食べたと思う。レストランでももちろん、台湾の料理をおいしく、楽しめた。夜市では特に自分たちの知らないものを食べる経験もでき

たし、中国茶は飲むだけでなく買い物も楽しんだ。楽しい思い出であると同時に、様々なことを知る経験でもあった。

(稲熊望畝)

11. 日本の伝統・日本の流行 —台湾の中の日本文化—

私は今回の公演で初めて海外へ行った。そこで出会った日本文化について述べようと思う。今回私たちは、日本の調味料・料理を題材にした人形劇を上演した。私は司会をやっていたのだが、そこでは劇に出てくる日本料理の簡単な説明もする。小学校で行った公演でも日本料理紹介をしたのだが、すでにその料理のことを知っている子供たちが多く、とても驚いた。やはり日本と台湾は同じアジア圏で似通っている部分もあるのだなと思った。そして、台湾で出会った人々は親日の方が多く、日本に興味を持ってきているのだと、うれしく思った。

また、街中にはファミリーマートやセブンイレブンといった日本のコンビニが多くあった。台湾の商品と並んで日本のスナック菓子も多く陳列されており、古くからの文化だけでなく、最近の文化も台湾に輸出されていた。よく、「世界中で大人気!」といわれているハローキティだが、日本にいたときには、本当にそうなのか疑っていた部分もあった。しかし、台北の Gondola などでハローキティのものがあがり、食べ物だけでなくキャラクターといったものでも日本の文化は海外へ進出しているのだと感じた。伝統的な日本文化だけでなく、スナック菓子やキャラクターといった現代日本の文化も台湾で広まっているということ、とても誇りに思う。

(今枝春菜)

12. わたしが出会った台湾の人々

今回の台湾公演で、わたしたちは多くの人と出

会い、お世話になった。公演先の方々だけでなく、台湾で立ち寄ったお店の人たちも私たちに好意的に接してくれた。中でも、私が印象に残っているのは、とあるカフェの店員さんとの出来事だ。

私は自由行動の時間に、同級のメンバーと一緒に先生に教えてもらったカフェに行くことにした。私たちは、第二外国語で中国語を専攻している子もいたが、実際に中国語を話せない。台湾の、特に若い人たちは英語が堪能であると聞いていたので、「まあ、英語が通じるなら大丈夫でしょ」といって出かけた。店に着いて、店員さんに英語で、「6名ですが、いいですか?」と聞いたが、あまりうまく通じず、お互いあたふたしてしまった。すると、近くにいた地元の人と思われる女性たちが、うまく通訳してくれたのだ。その女性たちのおかげで、無事に注文をすることもでき、おいしいケーキを食べることができた。最後には、英語であったが、店員さんともちゃんとコミュニケーションをとることができた。

台湾公演でたくさんの人と関わることができたが、私たちの多くは中国語がほとんど話せないので、コミュニケーションがとれなかったり、通訳の方を介しての会話が多かった。次の機会があれば、中国語を覚えて、中国語で台湾の人たちと話せたら、と思う。

(小林陽子)



猫空の茶芸館にて。

13. 先人たちの作品に、時を経て向き合う —故宮博物館の見学—

私たちが最終日訪れたのは故宮博物館である。いかにも中華風の外観であった。到着したとき天気は少し悪く雨が降りそうであった。ここに入る前に我々は入り口付近で、全員で記念撮影を行った。主要な観光地であるのか、中は人でいっぱいだった。いくつかのツアー団体がおり、日本人の団体も見かけた。チケットの購入方法で少し時間をとったものの、なんとか全員入場できた。

それぞれの展示はとても心惹かれるものばかりだった。書道家の作品の展示、中国の貴族が使っていた家具の展示、古代の遺物の展示などだ。数ある展示物の中でも、特に人気があったのが、清の時代に作られた翡翠の白菜である。白菜の展示は三階にあるのだが、これを見るために三階へ上がる階段あたりから人が並んでいるほどだった。実際に見てみると、とても精巧な作りで美しいものであった。

見学時間は二時間程度というとても短いものであったが、なんとか全部の展示を見ることができた。展示物の説明は中国語で書かれていたため、ほとんど理解でなかなかったが、先人たちの手にあったものを多くの時を経て自分が見ていることに感動した。

(福岡在菜)



珍しいデザートの中でも特に皆の注目を集めた「亀ゼリー」。

14. 想いの詰まったメッセージカード —交流協会台北事務所—

台湾公演最終日である2014年3月20日、私たちは交流協会台北事務所を訪れた。ここにはいったい何があるのか、そう思って待合室に入った私の目に飛び込んできたのは壁いっぱいに表示されたメッセージカードであった。台湾の人々が東日本大震災で被災した人々にあてて書いた応援メッセージが掲示されていたのである。大きな紙に何人もの人が書いたと思われるものや、小さなカードが貼られたものなど、形状や内容はバラバラだが、何百、何千ものメッセージがそこにあったのである。

まず初めに目に留まった寄せ書きを見てみると、そこには台湾の国旗と日本の国旗が描かれていて、そこに大きく「加油」（『頑張れ』の意）の文字が書かれていた。そしてその周りにおそらく小学生が書いたと思われるかわいらしい文字でたくさん言葉やイラストが描かれていたのである。中国語で書かれていたため何が書いてあったかわからないものもあったが、どのメッセージにも日本が元気になってほしいという願いが込められているように感じ、私は胸が熱くなった。この寄せ書き以外にも、幼稚園児から大人まで、本当にたくさんの人々からメッセージが寄せられていて、いろいろな人に支えられ今の日本があるのだと実感した。



故宮博物館にて、人形も一緒に記念撮影。

台湾の人々の想いを私は決して忘れない。本当に、本当にありがとう！謝謝台湾！！

(福岡弓佳)

II 〈じゃんけんぼん〉の活動紹介

愛知教育大学子ども向け人形劇サークル〈じゃんけんぼん〉は、主に幼稚園・保育園の子どもや小学生を対象に、手作りの脚本や人形で、年間約30回の公演を行っているボランティアサークルである。活動日は週に2回。脚本について話し合ったり、人形や小道具などの制作をしたり、上演中の劇の練習をしたりする。

さて、じゃんけんぼんの主となる活動は、やはり「人形劇の上演」である。そこで、普段の公演がどのようなものであるかを述べていこう。公演先の施設に上演1時間前に到着。舞台の組み立てや発声練習を行う。観客の子どもたちが入場したら、いよいよ上演開始だ。基本的には、2本の劇を上演する。いずれもメンバーたちが一生懸命考え、何度かの話し合いの末に出来上がった手づくりの脚本である。人形や小道具は約2か月かけて作った力作だ。公演に向けて日々練習してきた成果の見せ所である。観客の子どもたちが人形の呼びかけに応じてくれたり、笑いが起きたりすると、本当にうれしさを感じる。2本の劇の間には、子どもたちと簡単なゲームで遊ぶ。公演が終われば



海を越え台湾の子どもと楽しんだ「マヨケチャ」の決めポーズを故宮でも。



東日本大震災への支援メッセージに見入る学生たち。充実した4日間の日程を終え、帰国の途についた。



反省会。公演先の方に感想やアドバイス等をいただき、次に生かす。これが主な公演の内容である。

3月の初旬には「むすび座合宿」が一泊二日で行われる。愛知県内の人形劇のサークルが集まって行われる合宿で、私たちも毎年参加している。この合宿は、名古屋市のプロの人形劇団「むすび座」さんで行われる。合宿では実際の上演を見せていただいた。舞台裏を見ることができ、とても勉強になった。また、他の大学の人形劇を見て、私たちとは違った人形の作り方や、人形の演じ方から多くの勉強をした。合宿ということで、夜のイベントのお楽しみでは、大学ごとに色々な具材を持ち寄っての鍋パーティー、他大学の人も話す機会があった。また、サークルごとの出し物では推理クイズを担当、私たちも一人一人役をもって、楽しく演じながら盛り上げることができたと思う。

〈じゃんけんぽん〉には、2年生6名、1年生8名の学生が所属している（2013年度）。人形劇の経験の有無、裁縫の得意不得意などは問わず、興味のある者は歓迎というアットホームなサークルとして展開している。本サークルではメンバー同士の親しみやすさ、また子供達にも親しみやすくなるように、一人ひとりサークルネームと呼ばれるニックネームがつけられており、サークル内ではサークルネームで名前を呼び合っている。サークルネームは学年ごとにテーマが決められてお

り、2年生は調味料、1年生は寿司がテーマになっている。

今回の台湾公演には顧問として2名の先生に引率していただき、2年生5名、1年生6名、そして引退した3.4年生1名ずつが参加した。

（原江美子・栗木彩加・宮地結実子）

Ⅲ 台湾公演の成果と課題

今回公演を実施した3会場では、のべ約350名の方に鑑賞いただいた。臺灣師範大學では、台湾人や日本人の大学生、教職員の方々に加えて公館キャンパス近隣の臺北市立萬福國小の1学年3クラスの子どもたちと先生方、臺北市立幸安國小では、2学年3クラスの子どもたちと先生、保護者の方、臺北教育大學では、幼児教育専攻を中心とする大学生、教職員の方々にあわせて、夕方からの公演にもかかわらず、多くの親子連れの方が人形劇の公演のために集まってくださった。学生によるレポートのとおり、各公演先ではとてもあたたかな雰囲気の中で上演を終え、文化や言葉の違いを超えて、人形劇をとおして交流するという今回のねらいを十分達成することができたと思える。

以下、今回の公演において特にポイントとなった点についてふれたい。

第一は、劇の題材を工夫した点である。今回の

公演では、食文化の違いを楽しむ「マヨケチャの冒険」、音の世界を楽しむ「すぷーんちゃんのおんがくたい」の2公演、文化や言葉の違いそのものを楽しむ題材と、それらを問わず楽しめる題材とを上演した。

第二は、中国語と日本語の二か国語で上演したこと、第三は、現地大学生の協力により、台湾で一般的に使用されている表現にできるだけ近い標準正体字による字幕を準備し、人形劇の上演と同時にスクリーンに投影したことである。二つの演目のうち一つについては、すべての中国語のセリフを音声で準備し、「上演をとおして台湾の人たちと交流したい」という願いのもと、呼びかけや問いかけの言葉を中心に、全体の約4割を中国語で上演するに至った。中国語の発音は学生たちにとって容易ではなかったが、発音の良し悪しではなく、言葉を超えて台湾の人たちと交流したいという学生たちの思いにより、会場の皆さんと人形劇の世界を楽しみながら台湾の文化と日本の文化の違いや共通点を体験的に知る、貴重な機会となった。海外の子どもたちと交流する体験は、教師を目指す学生たちにとって大いに意義ある活動でもある。

今回の人形劇公演を交流の契機として、私たちが次に目指したいのは交流の継続である。有難いことに今回の公演では多くの方が、日本の子ども文化としての人形劇に興味を持って下さり、再度の公演を期待する励ましの声をいただいた。第二回のじゃんけんぽん台湾公演、そして台湾の人形劇の日本公演の実現を、私たちの次なる目標としたい。

(生寫亜樹子)

おわりに

初の海外公演となる台湾公演が終わった。学生達は、台湾の文化や習慣に直接触れ、現地の人々と直接触れ合うことによって、異文化理解が進むことを体感することができた。そして、子ども達

に対して働きかけたこと、子ども達の反応を受け止めたことは、授業での大切なスキルにつながるだろう。これから教師をめざす学生にとって、文化や言葉が異なる子ども達と交流することにより、コミュニケーションの原点を学べたことは、大きな収穫であった。

公演前の学生達は、台湾の子ども達に日本の人形劇が伝わるかという不安でいっぱいであった。初公演の前日は、消灯時間いっぱいまで、中国語の台詞を検討したり、中国語の発音練習を続けたりしていた。当日の公演直前も、現地の学生から中国語発音レッスンを熱心に受けていた姿が鮮明に残っている。学生達が精一杯努力したことが、公演中に、中国語での問いかけに元気に答える子ども達の姿、劇中の人形や料理に楽しそうに反応する子ども達の姿につながり、感激のうれし涙となって表れた。

私は、じゃんけんぽん OB として、また愛知教育大学で後輩達を指導する教員の一人として、この台湾公演に同行できたことを大変幸せに感じている。改めて、交流協会、公演先である国立臺灣師範大學、国立台北教育大學、臺北市立幸安國小の皆様、そして愛知教育大学をはじめ公演にかかわってくださった全ての方々から心から感謝したい。そしてこれを契機として、この交流が継続することを強く望んでいる。

(成田健之介)

[お問い合わせ先]

愛知教育大学 子ども向け人形劇サークル
じゃんけんぽん
448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢
愛知教育大学
連絡先(顧問教員)
学校教育講座 講師 生寫亜樹子
shojima@aecc.aichi-edu.ac.jp